

# いまこそ日本人が忘れかけた“最高の叡智”を思い出す時—— 「これからの百年、西洋と東洋がお互いに学びあう時代が来る。日本は世界の懸け橋に！」

「社会における人々の共感や信頼感などの目に見えない価値が大事」と語るのは、シンクタンク・ソフィアバンク代表の田坂広志氏。人と人との関係や信頼、評判や文化と言った目に見えない資本がこれからの主流になる、という持論を持つのが田坂氏。いま改めて、日本古来の土壌に根差した共存共栄の思想が求められている——。

シンクタンク・ソフィアバンク代表 多摩大学大学院教授  
**田坂 広志** Tasaka Hiroshi

様々な価値観が共存共栄しうる  
大きな器を持った国

—— 尖閣問題やレアアースの対日輸出規制問題など、最近の中国の動きを巡ってカントリーリスクが叫ばれるようになってきましたね。田坂さんはこうした中国の動きをどう考えていますか。

**田坂** こうした国家のエゴが衝突するような現実政治に処するときは、地政学的に「中国の軍事力や経済力に対抗するには日本も……」という考えも重要ですが、それだけでは、国際政治の現実には流されてしまう。そうした政治的判断の根底に、明確な歴史観と国家ビジョンが求められます。これから世界の歴史はどこに向かうか、その中で、日本がいかなる国を目指すか、という哲学や思想です。

「国家百年の計」こそが政治であると言われますが、政治家としての田坂は、今後百年を見通して日本の針路を語る歴史観、世界観、国家観がなければ、変わり

続ける現実に対して、軸がぶれない答えは出せないのですね。では、これから世界の歴史はどこに向かうのか。

端的に言えば、かつてヘーゲルが語った「歴史の弁証法」が起ころうでしょう。すなわち、弁証法の「螺旋的発展の法則」です。螺旋階段を登っていくと、一周回って元の位置に戻ってくる。しかし、必ず一段高い位置に登っている。同様に、歴史の発展においては、古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活してくるのです。

そして、この法則に基づけば、これから、かつて人類の文明の中心であった東洋的な文明が復活してくるでしょう。いま、中国やインドが巨大な人口と経済力を持って台頭してきているのが、その一つの表れです。

—— その辺りをもっと少し具体的に説明してもらえますか。

**田坂** 人類の歴史を振り返ると、まず文明は黄河やインダス、メソポタミアなど、東洋から起こった。そしてその後、文

明の中心は西に向かっていき、次第にヨーロッパが中心となり、次いで、アメリカが中心となった。しかし、これから、その文明の中心が東洋に回帰してくるのです。

だがそれは、単なる「古い文明の復活」ではない。なぜなら、弁証法のもう一つの法則が起るからです。それが、「対立物の

相互浸透の法則」。互いに対立し競い合うものは、次第に融合していく、という法則です。この法則に基づけば、西洋文明と東洋文明もまた、二十一世紀、融合していく方向に向かうでしょう。

では、そのとき、日本は、どのような役割を果たすべきか。その答えは明らかです。西洋も



田坂広志

1951年生まれ。74年東京大学工学部卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国シンクタンク・パウル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立に参画。取締役・創設戦略センター所長等を歴任。現在、フェロー。2000年多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立、代表に就任。03年社会起業家フォーラムを設立。03年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。

東洋も含めた多種多様な価値観が共存共栄できるような国となっていくことです。

—— 西洋と東洋の価値観を融合する国になると。

**田坂** ええ。現在の世界は、キリスト教とイスラム教が対立し「文明の衝突」が起っていると云われますが、日本という国は、すべてを抱擁する「大乘仏教」の国であり、様々な神が共存する「八百万の神」の国です。このように多様な価値観を受け入れ、その共存を図っていくことのできる叡智が宿るこの国こそが、いま、世界の歴史において果たすべき役割がある。

例えば、日本人はクリスマスには教会に行き、大晦日は除夜の鐘を聞きに寺に行き、年が明けると門松を立てて神社に参る。これは日本人が宗教的に無節操なのではなく、どのような宗教でも、その奥に「大いなるもの」を見ているから、それらを同時に受け入れることができるのです。言葉の本来の意味での多神教の国なのです。

そして、同時に、宗教的な情操が、日常生活の中に浸透している。人と出会うには「ご縁です」と語り、その奇跡のような出会いに感謝して「有り難い」と語る。食事の時には、命を頂くという意味で「いただきます」と言います。すべての宗教を受け入れ、日常生活に宗教性が浸透しているという意味で、本来、日本という国は、世界でも最も宗教的に成熟している国なのである。

## 西洋文明と東洋文明の融合を

—— なるほど。しかし、いまそれが、多くの日本人の心の中から忘れられてしまっているのではないですか。

**田坂** その通り。そこに、現在の日本という国の問題がある。日本人は、その国の土壌に素晴らしい叡智を宿しながら、それを忘れてしまい、海外の思想や精神や文化に目を奪われている。そのことを私は、近著『忘れられた叡智』で書いたの

ですね。

——では、この日本という国は、西洋文明と東洋文明の融合を、どのような形で実現していけばよいと思いますか。

**田坂** 西洋文明が大きく開花させたものに、「科学技術」と「資本主義」という二つの叡智があります。日本という国は、その叡智を東洋文明の叡智と結びつけていくべきでしょう。

なぜなら、この日本という国は、東洋文明の永い伝統の中にあり、深みある思想、精神、文化を持ちながら、一方で、世界でも最高水準の科学技術と資本主義を開花させてきた稀有な国だからです。これに対して、中国やインドは、その土壤に深い東洋的な叡智を宿してはいますが、まだ科学技術においても、資本主義や民主主義においても、未成熟な段階です。

そのことを考えるならば、や

やインドには「低コスト競争」では勝てない状況となり、製品の「高付加価値化」が叫ばれていますが、その「高付加価値化」の真の意味は、単に「ハイテク技術」を駆使してという意味ではない。「おもてなしの精神」を駆使してという意味でもあることに気がつくべきでしょう。

——では、「経済力と文化力の融合」という意味で、日本の政府は、これから何を行うべきでしょうか。

**田坂** まず政府が行うべきは、「産業構造の抜本的転換」ですね。これまでの産業は、「社会に対してどのような商品とサービスを提供する産業か」という企業中心の視点から分類された「シーズ型産業」と呼ぶべきものでした。これを「生活者のどのようなニーズに応える産業か」という生活者中心の視点で分類される「ニーズ型産業」に転換していくべきです。

実は、二十一世紀に大きく伸びると期待される環境産業、高齢者産業、教育産業などは、す



はり、この日本という国こそが、まず「The bridge between East and West」というビジョンを掲げ、西洋文明と東洋文明の架け橋となっていく、さらには「Fusion of East and West」、すなわち、西洋文明と東洋文明の融合を実現していくべきなのです。

——それは、日本にしか果たせない役割なのですね。

**田坂** いや、もし日本という国がその歴史的役割を果たさなければ、いつか中国やインドがその役割を果たすようになるでしょう。しかし、現在の中国や

べて、この「ニーズ型産業」なのです。そして、先ほど述べた「おもてなしの精神」を産業全体に適用すると、まさに「企業中心のシーズ型」から「生活者中心のニーズ型」への産業構造の転換が求められるのです。

では、具体的にはどのような政策が求められるか。例えば、「シルバー・ニューデール」と呼ぶべき政策ですね。これは高齢社会を迎える日本が、「世界で最も高齢者が幸せに生活できる国を創ろう」というビジョンを高く掲げ、官民一体となり、異業種企業が結集する経済特区などの場を創り、高齢者向けのパッケージ商品やトータルサービス、さらにはシニアコミュニティを創出するという政策です。

**異業種の連携で世界のニーズを掘り起せ!**

——なるほど、ニーズ型産業を創出するためには、異業種連携が鍵になるわけですね。

**田坂** そうですね。例えば、

インドは、まだまだ「豊かさ」という点では、国民一人あたりのGDPを見ても、日本の比較にはならないですね。

そして、中国については、残念ながら、数十年に亘る社会主義政権の政策のもとで、宗教的な情操や東洋的な叡智は見失われてきています。私は、中国という国の将来を考えると、数千年に亘って培われてきた宗教的な伝統と東洋的な文化を活かせるか否かが、その将来を決めるだろうと思っています。

ですから、もし日本が、西洋文明と東洋文明の融合という、この歴史的な役割を深く自覚するならば、そこには必ず、世界における日本の精神的・文化的なリーダーシップが生まれてくるのです。ソフトウェアの時代」と言われますが、その精神的・文化的なリーダーシップこそが、二十一世紀において

シルバークommunityを創るためには、デベロッパーやマンション業者を始め、バリアフリー家具、介護の人材派遣、医療サービス、健康食品、生涯学習に至るまで、ほとんどすべての産業・業種の連携が必要になります。そして、こうして異業種が集まると、生活者や顧客の特定のニーズを中心として様々な商品やサービスが集まった「商品生態系」が生まれてくる。実は、これからの時代の競争は、「商品同士の競争」ではなく、この「商品生態系同士の競争」になっていくのです。政府も企業も、そのことに気が付かなければならない。

——昨年、UAE（アラブ首長国連邦）で原子力発電所の受注で韓国に敗れた時にも同じような指摘がなされました。

**田坂** そうです。UAEの真のニーズは、「原子力発電所の技術」ではない。「長期的な電力供給」こそが彼らのニーズなのです。そのことを理解するならば、単に技術や設備の提供だけ

は、軍事的・経済的リーダーシップを超える重要なものになっていくからです。

**経済力と文化力をいかに融合していくか**

——日本日本の産業界が欧米だけでなく、韓国や中国に押されて元気がないと言いますね。しかし、われわれは自信を持っていいのです。

**田坂** そうですね。ここまで述べた歴史観と国家観を前提としたとき、では、これからの国家や企業の戦略はどうあるべきか。その答えは明確です。「経済力と文化力の融合」。それを進めていくべきです。特に日本においては、「最先端の科学技術」と「おもてなしの精神」を結び付けていくことです。

例えば、トイレの進化。これは、いまや単に用を足す空間ではない。脱臭機能や保温機能、さらには健診機能など、最先端の技術が集約され、人間に優しい「おもてなし空間」へと進化している。いま、低賃金の中国

でなく、人材派遣から人材育成まで含めたトータルな「商品生態系」を提案するべきだったのです。技術力や「ものづくり」だけでは勝てない時代になっているのです。

しかし、この「商品生態系」の戦略もまた、その根底に、「おもてなしの精神」や「顧客中心の文化」などが無ければ、本当には力を発揮できない。やはり大切なのは、「経済力と文化力の融合」であり、この日本という国に宿る叡智なのです。